

雑記抄

加齢・経年・老齢化

コトバ・ことは・言葉。日本語のニュアンスほど多義で微妙で複雑なものはないと言われるが、新聞記事から抜粋させていただき、少子・高齢化の諸相の一面を略記してみよう。

加齢現象：加齢とは、年をとることであり、同時に生理機能の衰退、老化であるという。

眼科医の笹本洋一先生によると、飛蚊症も白内障も加齢現象つまり高齢になればなるほど、生理的な発症が多いそうである。蚊のような虫が飛んだり、ゴマ粒だったり、輪ゴムのようなだったり、糸くずみたいだったりする飛蚊症。目の中にある水晶体が濁って物がかすんで見えたり、まぶしくなったり、ぼやっとぼやけて二重にも三重にも見える白内障。

病的より、ほとんどの飛蚊症や白内障は加齢が原因であるというのだから、「お年ですからネ…。」

と診断されたショックは「それじゃ先生、どうすれば…。」と溜め息の連発。お薬や手術に頼つて要は「めげず・あせらず・あきらめず」が何よりの日々。

経年変化：フリアーアナウンサーの梶原しげる氏は「パティナー（経年変化を意味するスペイン語）がブームになっているファッション界や革製品、そしてケータイのデザインにも、古いほど価値を増すと、使い込まれた物を持つ独特の風合いが好まれている。」などと説かれていた。

この経年変化は老後の夫婦の好ましい現象として、お互いのとげもへこみもなだらかにするという。

「母さんあつての人生」、「角がとれて丸くなった父さん」というように、いわば「相手の欠点がいとおしくなる」のが経年変化だというのである。

年をとる・重ねる・経るとは、人生体験の連続であるから、「経年変化を楽しむ」という気風は「連れ添うこと」への老夫婦の生活過程ともいえる。

そこでの経年変化は極めて緩やかで穏やかで和らかな経過そのものであり、夫唱婦随↓婦唱夫随の循環ではなからうか。

梶原しげる氏によれば「年を重ねるにつれ、きしみが目立ち、亀裂があらわになる老朽化というケースが少なく無い」ともいう。これは正に「溝が深まる好ましくない経年変化すなわち老朽化」である…。

老朽化といえば、組織疲労・金属疲労そして心身疲労が取り沙汰されるこのごろ、ともすればマン

ネリ化の傾向が問題となる各種の機関・団体などの施策・事業・自動車などの金属部分のサビ・カビ・ヒビがあり、産経・教育・社会などの人々に被せられる心労や過労ではなからうか…。

良き伝統に基づく新企画や実践の成果と課題には常に確認と追求が不可欠であるから、加齢・経年・老朽化におけるリスク管理またはクライシス管理といった危機管理に意を注ぐべきである。そうでないと、加齢はただ単なる馬齢を重ねるだけであり、経年変化は老齢化を増徴するだけとなる。

開拓一〇年有る余のふるさと東川にあつて、いうところの少子・高齢化の町の風の吹き回しや如何であろうか。

前中央分館長

尾池隆男